

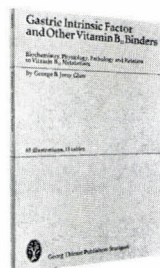
胃液内因子、ならびにその他のビタミン B₁₂ 結合蛋白の研究は、約120年前に Addison, Biermer らによって悪性貧血の症例が記載されて以来、1926年 Minot による肝臓療法の有効性とそれに続くビタミン B₁₂ の発見、さらに Castle の胃液内因子の発見という歴史を経て現在に至っている。臨床的に悪性貧血は現在その名前と裏腹に、貧血の内でも良性に属しているが、一方、生命の追求という研究的側面から見ると、ビタミン B₁₂ の吸収とそれに関与する因子、生体内の輸送、貯蔵の様式、更に造血に対する関与形式等の面で未だに解決されていない多くの問題を含み、ホルモン等、他の物質と同様にその研究は生体の多方面に亘り多くの神秘さを提供してくれる。

さて、本書は以上のような多くの面のうちで、特に胃液内因子を中心としビタミン B₁₂ 結合蛋白を綜説的にまとめたものである。序に記されているように、1970年 Glass (N. Y. 医科大学消化器研究室所長) が Gly-

□ 書 評 □
「Gastric Intrinsic Factor
and
Other Vitamin B₁₂ Binders」

—Biochemistry, Physiology,
Pathology and Relation to
Vitamin B₁₂ Metabolism—

G. B. J. Glass 著



千葉大学医学部第1内科
奥 田 邦 雄

coprotein と称される書物の内の胃液内因子、ならびにビタミン B₁₂ 結合蛋白の項のために書き始めた近刊で、文献は up-to-date である。本

著の目的は今までに発表された情報を提供するというものであり、そのために165頁中45頁が参考文献でめられている。しかし、内容はこのような本にありがちな統一性に欠けるところがないのは著者 Glass の実力を示すものであろう。また、参考文献がこのように多いことは専門家にとって有難いだけでなく、初心者に研究の緒を与えてもくれる。

内容は胃液内因子に関する章が前半の約半分をしめ、その歴史、純化、由来臓器、内因子抗体、B₁₂ との結合様式、さらには臨床との関連等を多くの文献を引用して要領よくまとめている。後半は非内因子性結合蛋白を論じているが、その研究が未だ内因子ほど進んでいないためか、総括的なもので終わっている。ことに血液消化・吸収を学ぶ者には必携の参考書である。

(Georg Thieme Verlag,
Stuttgart 165 pp, 65 figs, 1974
¥ 5,850)

医学書院洋書部取扱い